

鷹取山自然観察会会報

2019.9.8 NO.25

鷹取山の野鳥

はじめに

日本ではこれまで 500 種以上の鳥類が確認されていて、鳥類は自然の状況を知るためのよい指標にもなっている。

過去に鷹取山周辺では鳥類の調査を継続的に行った記録は見られない。従って、過去にどのような鳥類の生息状況であったか不明である。当会では 2014 年から鳥類調査を開始し、当初は比較的観察しやすい冬から春の繁殖期まで調査を行って、これまでの結果は会報 8 号、13 号、17 号、21 号で報告してきた。

2018 年からはモニタリングサイト 1000 里地調査で調査を行うこととして調査期間及び時間、調査区間の一部を変更した。

1. 鳥類の生息について

野鳥は、他の動物に比べて移動距離が大きく、夏鳥、冬鳥などは季節によって移動を繰り返しているため、地域の環境を把握するためには継続的な調査が必要だと思う。

鳥類の生態は、年間を通して同じ場所に生息し、繁殖行動も見られる留鳥がいる。留鳥とはシジュウカラ、ヤマガラ、エナガ、コゲラ、スズメ、カラス類など繁殖行動が見られる鳥類をいう。これらの繁殖を可能とするためには餌場、ねぐらなど多様な自然環境が必要である。

一方、日本国内で冬をあたためた平地で過ごし、夏は近くの山の中に入る鳥を漂鳥という。おもな漂鳥は、ムクドリ、ヒヨドリ、ウグイスなどである。季節によって留鳥より国内をずっと広い範囲を移動している。

また、通過鳥（渡り鳥）として夏鳥、冬鳥と呼ばれている鳥もいる。夏鳥とは、ツバメ、カッコウのように春に日本に来て繁殖し、繁殖が終わると南方に帰っていく鳥類をいう。冬鳥とは、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミなど日本より北の地方で繁殖し、冬に日本に渡来する鳥類をいう。通過鳥の生息場所は、自然豊かな環境を



餌場としている。

野鳥の生息環境は種によって違いがあり、山林、草原、田畑、水辺などですみ分けを行っている。鷹取山でよく見られるシジュウカラ、ヤマガラ、コゲラなどは山林を好み、ホオジロ、ツグミなどは草原を好むようである。

三浦半島は三方を海に囲まれ、中央部に標高 200m の低山が連なり、照葉樹林や落葉樹が茂る緑多い地域である。横須賀市教育情報センターの Web では、三浦半島で見られる野鳥として 112 種を掲載していて、内 50 種ほどは水辺の鳥であるため、60 種位が山や野原で見られることになる。

鷹取山には、水場はなく水辺に棲む鳥類はあまり見られない。草原や山林に生息する鳥類を中心に調査しているが、以下に調査結果を掲載する。

2. 調査方法

これまで調査は環境省自然環境局及び日本自然保護協会における「モニタリングサイト 1000 里地調査マニュアル」に準じて行ってきた。調査ルートは植生の違う 6 区間（2016 年までは 4 区間）に分け調査した。調査頻度は 2016～2017 年は 12 月～翌年 5 月の間に月 2 回、第 1、3 金

曜日に行った。

調査ルート歩きながら、目撃、鳴き声（地鳴き、さえずり）で種を判別し記録した。ただし、2014～2015年は12月～翌年5月の間に月1回行った。

2018年からは、モニ1000里地調査に登録し、マニュアルにより調査を行った。

モニ1000里地では区間を1km程度としており、調査ルートは図のように変更をした。また、調査期間は越冬期、繁殖期として6回となっている。調査時間帯は繁殖期では日の出からとなっているが、6時半開始として実施した。越冬期は9時30分開始とした。

3. 調査結果

ここでは、2014～2018年まで6か年の年別の調査結果を表（4ページ）に示した。2018年は全期間を通して27種が記録できた。また、2014年から現在まで、記録できたものは累積で44種となっている。

2018年の調査期間を通して数が多い鳥はスズメ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、アオジ、シジュウカラ、コゲラ、ハシブトガラスの順であ



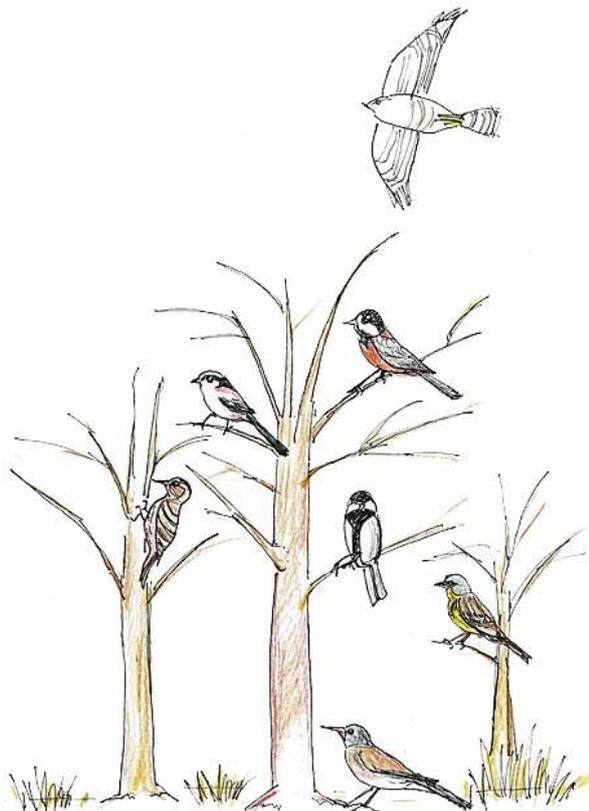
り、これらはアオジを除き留鳥であった。また、スズメ、アオゲラは2017年と比較して観察数が多かった。一方、2017年までに観察したウソ、アカハラ、ツグミ、猛禽類のオオタカ、ノスリは観察できなかった。

4. その他

鳥類の調査は鳴き声と直接の目視であるが、鳥類の個体数は見逃しが多く、結果以上に生息していると思われる。鳥類によっては、鳴き声を発することなく藪の中に潜んでいるものも多いようである。冬の間は多くの鳥はさえずりよりも地鳴きが多く、判別がしづらいことが多い。たとえば、ウグイスのさえずりは「ホーホケキョ」と誰でも知っているが、冬の地鳴きは「チャッ、チャッ」と鳴いている。シジュウカラのさえずりは「ツピ、ツピ、ツピ」であるが、地鳴きは「ジューク、ジューク」などと鳴く。鳥類は種ごとに様々な鳴き方をしている。鳥の鳴き声は仲間同士の会話が主であるが、縄張りや警戒音までさまざまである。

我々の調査では経験不足のところもあり、これまでも見逃した野鳥は多くあったと思われる。鷹取山では、我々の調査として記録されていないが、夏鳥としてオオルリ、センダイムシクイ、冬鳥としてルリビタキ、ビンズイ、クロジなどの生息情報もある。また、住民の方からフクロウの鳴き声情報も寄せられている。我々の調査の課題としては調査回数が少ないこと、調査精度の向上があげられる。

自然観察会では、野鳥の繁殖に影響しないようマナーを守り調査を行っており、今後も鳥類調査を継続していく。



注) モニタリングサイト 1000 里地調査について
 モニ 1000 里地調査は、環境省生物多様性センターが中心となって全国的な生態系の変化を把握することを目的に行っている。調査は市民が調査項目（植物相、野鳥、蝶類、カエル類、ホタル、ほ乳類など 9 項目）を選択してボランティアで調査を実施することにより、全国的な生態系の変化を把握している。現在、全国 191 ケ所の一般サイトが登録されていて、神奈川県では 24 か所、横須賀市は 2 か所（光の丘水辺公園、鷹取山）で 5 年間を一区切りとして調査を行っている。



オオタカ

2018 年調査に参加した人（鷹取山自然観察会）

本多久男、中村紀雄、高橋和子、島村健二、三科清高、市川實、伊沢昭司、板垣加代子、金子龍次

（順不同、敬称略）

セミの抜け殻調査について —2019 年調査報告—

セミは夏の風物詩で、鷹取山周辺では例年、7 月上旬からニイニゼミが鳴き始め、梅雨が明けるとにはアブラゼミ、ミンミンゼミの大きな鳴き声が響き、ツクツクボウシは秋まで鳴き続ける。朝夕はヒグラシの声も楽しめる。セミの生活史は夏に受精して雌は枯れ木に卵を産み付ける。卵から孵った幼虫は地中で脱皮を繰り返し大きくなっていく。アブラゼミは 5 年ほど地中で過ごし、終令の幼虫は生息場所からあまり移動せずに夜間に地上に出て成虫となる。成虫は 1 週間から 1 か月程生き、雄は交尾の相手を見つけるために大きな声で鳴く。セミは樹林性の昆虫であり、セミの抜け殻調査は全国的に行われていて、その結果は自然環境のバロメーターとなっている。2019 年も、鷹取山周辺で 4 年目となるセミの抜け殻調査を行った。

1. 調査方法

7 月 26 日と 8 月 25 日の 2 回、鷹取山の観察路を鷹取山公園から田浦に向かって歩きながら木や草に付いている抜け殻を採取して調べた（5 ページの調査区間図参照）。種の同定は会報 13 号（7 頁）の方法により確認した。

2. 調査結果

調査結果は 5 ページの表 1、表 2 に示した。今年の 7 月末の調査では、ニイニゼミが 87.5%、ツクツクボウシが 12.5% で、アブラゼミ、ミンミンゼミは見られなかった。7 月上旬に気温の低い日が続いたため（7 月の横浜の平均気温 24.3 度）、2 種のセミの羽化が遅くなったものと思われる。ツクツクボウシに羽化には、低温による影響が小さいのかもしれない。8 月の調査まで含めると、アブラゼミが 44.2%、ミンミンゼミが 18.8%、ニイニゼミが 24.6%、ツクツクボウシが 8.7%、ヒグラシが 3.6% とな

った。ヒグラシは、杉林の周辺のみで採取された。この違いは、セミの種類による生息場所の違いが反映された結果であると考えられる。また、抜け殻は採取されなかったが、クマゼミの鳴き声は毎年増えている。今年は A 区間内で成虫が確認されたので、数年後には、鷹取山でもクマゼミが羽化し、抜け殻が見られるようになるかもしれない。4 年間の調査結果全体を 5 ページのグラフで見ると、鷹取山のセミは、7 月はニイニゼミ、8 月はアブラゼミとミンミンゼミが優占種となっていることがわかる。

なお、年により最多種がアブラゼミとなったりニイニゼミとなったりするのは、調査精度に問題があるのか、あるいは、種別の発生数や羽化数に年変動があるのかは、現時点ではわからない。また、台風などの影響で風雨の強い日も多かったため、その影響で落下したセミの抜け殻も多数あったと思われる。難しいが、調査回数を増やすことも考えたい。

3. その他

全国的には「セミの抜け殻しらべ市民ネット」や日本自然保護協会などで調査が行われている。市民ネットなどの調査では調査範囲を決めて毎年 3 回程度継続的に続けることとなっている。鷹取山でも継続的に調査ができればセミの変化がわかると思われる。クマゼミは、以前は城ヶ島が北限とされていたが、近年鷹取山及びその周辺でも普通に鳴き声が聞こえる。セミは幼虫期間が長いので、抜け殻調査には、複数年に及ぶ環境の変化が反映されると考えられる。毎年、継続して調査することが望ましい。

2018 年調査に参加した人（鷹取山自然観察会会員）

本多久男、伊沢昭司、郡司久、村上良二、市川實、竹之下香苗、三科清高（順不同、敬称略）

表 鳥類年別調査結果

	科名	種名	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
1	キジ目キジ科	コジュケイ	8(4/6)	8(4/6)	10(6/10)	24(7/11)	18(7/11)
2	キツツキ目 キツツキ科	アオゲラ	0	1(1/6)	2(2/10)	3(2/11)	8(3/11)
3		アカゲラ?	0	1(1/6)	0	0	0
4		コゲラ	9(5/6)	15(6/6)	21(8/10)	38(10/11)	43(8/11)
5	スズメ目アトリ科	アカウソ	1(1/6)	0	0	0	0
6		ウソ	10(2/6)	2(1/6)	28(4/10)	12(3/11)	0
7		シメ	0	0	5(2/10)	4(3/11)	4(2/11)
8		カワラヒワ	2(1/6)	0	5(3/10)	2(1/11)	5(2/11)
9	スズメ目ウグイス科	ウグイス	13(5/6)	29(5/6)	31(9/10)	61(9/11)	89(9/11)
10	スズメ目エナガ科	エナガ	3(1/6)	14(3/6)	11(4/10)	32(6/11)	21(3/11)
11	スズメ目カラス科	ハシブトガラス	15(5/6)	10(5/6)	34(8/10)	58(10/11)	42(9/11)
12		ハシボソガラス	3(1/6)	8(2/6)	5(2/10)	11(2/11)	4(3/11)
13	スズメ目シジュウカラ科	シジュウカラ	14(6/6)	18(6/6)	25(7/10)	68(11/11)	65(9/11)
14		ヤマガラ	1(1/6)	4(1/6)	8(3/10)	8(3/11)	17(6/11)
15	スズメ目スズメ科	スズメ	41(6/6)	34(6/6)	87(10/10)	39(8/11)	113(9/11)
16	スズメ目セキレイ科	ハクセキレイ	0	4(2/6)	6(4/10)	12(6/11)	1(1/11)
17		キセキレイ	0	0	0	1(1/11)	1(1/11)
18	スズメ目ツバメ科	ツバメ	0	1(1/6)	6(2/10)	19(3/11)	5(2/11)
19		イワツバメ	0	0	3(1/10)	0	0
20	スズメ目ヒヨドリ科	ヒヨドリ	36(6/6)	66(6/6)	74(10/10)	162(10/11)	113(8/11)
21	スズメ目ホオジロ科	アオジ	10(4/6)	2(2/6)	17(5/10)	31(7/11)	69(8/11)
22		ホオジロ	2(2/6)	1(1/6)	15(7/10)	9(6/11)	6(4/11)
24	スズメ目ムクドリ科	ムクドリ	8(3/6)	0	22(5/10)	43(3/11)	11(2/11)
25	スズメ目メジロ科	メジロ	20(5/6)	42(5/6)	31(8/10)	169(11/11)	88(7/11)
26	スズメ目チメドリ科	ガビチョウ	1(1/6)	7(3/6)	6(4/10)	16(6/11)	30(5/11)
27	スズメ目ツグミ科	アカハラ	0	2(2/6)	0	0	0
28		イソヒヨドリ	0	1(1/6)	0	1(1/11)	0
29		シロハラ	3(3/6)	0	2(2/10)	3(3/11)	1(1/11)
30		ツグミ	3(3/6)	0	4(2/10)	7(3/11)	0
31		トラツグミ	0	0	0	1(1/11)	0
32		大型ツグミ類	0	2(2/6)	1(1/10)	0	0
33	スズメ目ヒタキ科	キビタキ	0	1(1/6)	0	0	0
34		ジョウビタキ	1(1/6)	1(1/6)	3(2/10)	6(4/11)	2(2/11)
35	スズメ目モズ科	モズ	1(1/6)	3(2/6)	0	4(4/11)	2(1/11)
36	スズメ目レンジャク科	ヒレンジャク	13(1/6)	0	0	1(1/11)	0
37	タカ目タカ科	オオタカ	0	1(1/6)	0	0	0
38		トビ	5(3/6)	8(4/6)	29(10/10)	29(10/11)	21(8/11)
39		ノスリ	0	1(1/6)	3(2/10)	1(1/11)	3(3/11)
40	ハト目ハト科	キジバト	7(3/6)	4(3/6)	10(6/10)	9(3/11)	6(4/11)
41		ドバト	3(2/6)	2(2/6)	7(1/10)	9(3/11)	0
42	ハヤブサ目ハヤブサ科	チョウゲンボウ	0	0	0	1(1/11)	0
43		ハヤブサ	0	0	0	1(1/11)	0
44	カッコウ目カッコウ科	ホトギス	0	0	0	1(1/11)	0
		個体数	233	289	512	896	792
		種数	26	30	30	36	27

セミの抜け殻調査 調査区間図

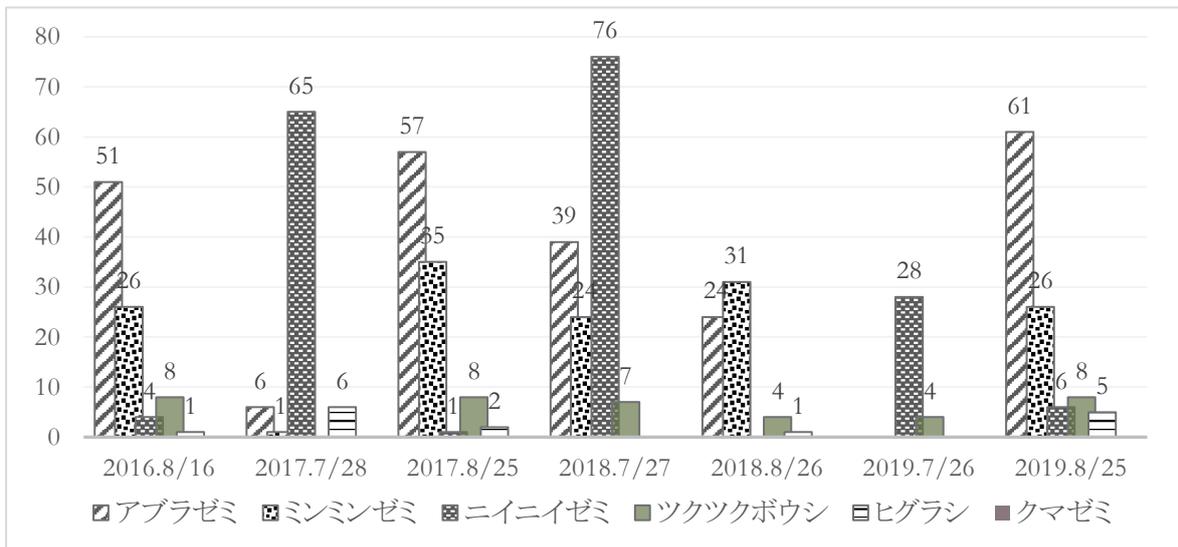


表1 セミの抜け殻調査結果 (2019年 鷹取山で鳴き声が聞こえる6種)

種類 調査区間→	2019/07/26					2019/08/25					2019計				
	A	D	E	F	計(%)	A	D	E	F	計(%)	A	D	E	F	計(%)
アブラゼミ						25	27	2	7	61(57.5)	25	27	2	7	61(44.2)
ミンミンゼミ						13	9	3	1	26(24.5)	13	9	3	1	26(18.9)
ニイニイゼミ	2	16	4	6	28(87.5)	2	3		1	6(5.7)	4	19	4	7	34(24.6)
ツクツクボウシ		4			4(12.5)	1	4			5(4.7)	1	8			9(6.5)
ヒグラシ						1	2	1	4	8(7.5)	1	2	1	4	8(5.8)
クマゼミ															
計	2	20	4	6	32(100)	42	45	6	13	106(100)					138(100)

表2 セミの抜け殻調査結果 (2016年～2019年)

年 月/日	2016年		2017年		2018年			2019年		
	8/16	計(%)	7/28	8/25	7/27	8/26	計(%)	7/26	8/25	計(%)
アブラゼミ	51(59.7)	63(34.8)	6	57	39	24	63(30.6)		61	61(44.2)
ミンミンゼミ	26(28.9)	36(19.9)	1	35	24	31	55(26.7)		26	26(18.8)
ニイニイゼミ	4(4.4)	66(36.5)	65	1	76		76(36.9)	28	26	34(24.6)
ツクツクボウシ	8(8.9)	8(4.4)		8	7	4	11(5.3)	4	8	12(8.7)
ヒグラシ	1(1.1)	8(4.4)	6	2		1	1(0.5)		5	5(3.6)
クマゼミ										
計	90(100)	181(100)	78	103	146	60	206(100)	32	106	138(100)



今後の予定

巣箱の掛け替え

シジュウカラ、ヤマガラは巣箱をよく利用してくれる野鳥でもあり、当会では2013年から野鳥の保護を目的に巣箱掛けを行ってきた。

2013年に8個、2014年に9個の巣箱を子ども達とイベントを開催して鷹取山公園にかけてきた。現在17個の巣箱が掛かっている。

今年は昨年度と同様に今まで設置した巣箱の掃除と利用状況を調べる予定である。巣箱を掛ける時期は11月～3月が適切といわれ、出来るだけ早い時期に掛けてしまうのが良いという。そこで、昨年と同様に次の日程で行ので、ぜひご参加してください。



1. 予定日 11月22日(金曜日)9時30分
雨天の場合は11月27日(水曜日)に延期
2. 集合場所 鷹取山公園あずまや集合 12時解散
3. 用意するもの 軍手、作業できる服装
脚立などはこちらで用意

気の毒なヒグラシ

2019年8月25日のセミの抜け殻調査時に、セミヤドリガの幼虫に寄生されたヒグラシの雌成虫を見つけた。前年に樹皮に産み付けられたセミヤドリガの卵は越冬し、夏に孵化して1mmほどの1齢幼虫となる。幼虫は木にとまったセミ成虫の脚を伝って寄生し、セミの腹部から体液を吸って成長する。1cmほどの終齢(5齢)幼虫は白い口状物質に覆われている。十分成長するとセミの体を離れ、樹木の幹や下草に繭(蛹)を作る。羽化した成虫は前翅開長2cmほどの黒褐色の蛾で目立たない。寄生されたセミは弱っても死ぬことはない。(三科 清高)



鷹取山自然観察会 (ホームページを見て下さい)

HP : 鷹取山自然観察会

<http://takatoriyama.eco.coocan.jp/>

連絡先 : 世話人代表 : 本多久男 e-mail : takatori_0721@nifty.com